



Title	「雲伴居」にみる白井晟一の伝統的様式への姿勢 : 桂離宮の影響に着目して
Author(s)	羽藤, 広輔
Citation	デザイン理論. 2014, 63, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56306
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「雲伴居」にみる白井晟一の伝統的様式への姿勢

— 桂離宮の影響に着目して —

羽藤広輔／東京藝術大学

研究の背景と目的

本研究は、白井晟一（1905-1983）の遺作であり本人が使用する目的で計画された木造和風住宅「雲伴居」（1984）を題材に、桂離宮の影響に着目して、その意匠的特徴と背景となった白井の建築観を考察するものである。

白井は昭和期住宅史において和風を手がけた代表的建築家と捉えられ、中でも「雲伴居」は、書齋に床の間・付書院を備え、日本の伝統的様式に近い構成が顕著に見受けられる特異な事例である。

他方、桂離宮は日本の近代建築家達にとって最も重要な日本の古典の一つであったことは言うまでもなく、「雲伴居」にも桂離宮の影響が見て取れることから、本研究では、白井の和風建築観や桂離宮観を踏まえた上で、「雲伴居」計画における白井の古典に対する姿勢を明らかにする。その際、同時代の和風を手がけた建築家、すなわち、村野藤吾（1891-1984）と堀口捨己（1895-1984）の作品で、同様に桂離宮から影響を受けた事例との比較を行い、その姿勢の相違を考察する。

先行研究についてであるが、白井に関する学術論文は学会誌に公表されたものがほとんどない。近年、白井晟一の業績を見直す展覧会が連続して開催され、それに伴っていくつかの「雲伴居」に言及した批評が発表されたが、名や計画の経緯に関する記述が見られるのみで、建築自体の構成に論及するものではない。

対象とする資料は、「雲伴居」については、竣工当時の建築専門誌の記事と『写真集「雲伴居」』（1993）であり、また白井の言説

（エッセーや対談記事）については、『白井晟一全集』別巻Ⅰ・Ⅱ（1988）に収録されたものと、他2つの対談記事とする。その他、発表者が「雲伴居」関係者に対し行ったインタビューについても資料として参照している。

「雲伴居」概要

「雲伴居」は、「書堂」である。白井は、1960年代中頃から亡くなる1983年までの間、書の手習いに大きな時間を割いた。白井が最晩年において、そこで書三昧の生活を送るために計画したのが「雲伴居」である。

敷地は、京都市右京区に位置している。白井は1983年にこの現場で倒れ、亡くなったが、「雲伴居」は、遺された人々の手により、白井の言い遺した細密な指示に従って、1984年の9月に完成したという。

建物本体は木造平屋の和風建築で、50坪弱の矩形平面となっている。内部は、大きく分けて2つの座敷から成り、東側に書齋が、西側に寝室が配されている。書齋に設けられた上段は、白井が書を書くためのスペースであり、書机と書院窓を備え、床の間が隣接していることから書院造の付書院の形式に近い。

白井晟一の和風建築観と桂離宮観

白井の言説によれば、白井の和風建築観の特徴は、一貫して数寄屋を批判している点であり、対談「建築と書」（1980）では、一部の人間だけが享受する、官能に媚び、装飾化した形式を否定し、「書院の前身」なるもの、すなわち、民衆の生活に根ざした健全な空間をよしとする考えが示された。

従って桂離宮も「特権者のための建物以外でない」という点で、批判の対象となるのだが、見学して学ぶところが多かったという事実も伝えられており、造形に向かう精神は否定しながらも、良質な和風建築の物的手本としては参考にするという両義性が見てとれる。

また最晩年には、桂離宮における数寄屋の要素をある程度認める、態度の軟化が見てとれた。

「雲伴居素描」スケッチにみる「雲伴居」構想過程

「雲伴居」構想の過程を読み解くにあたり、重要な資料として挙げられるのが、『写真集「雲伴居」』に収録された「雲伴居素描」スケッチである。この中には、フリーハンドで描かれた平面図、内観パース、内部の展開図のスケッチが含まれている。

「雲伴居」書齋上段を描いたパースのスケッチには、桂離宮新御殿一の間上段に近似した構成が描かれており、また書齋の吹抜窓では、桂離宮の木瓜形のモチーフが使用されていた。関係者によれば、白井は「雲伴居」計画期に数回にわたって桂離宮に足を運んでおり、「雲伴居」構想過程における桂離宮の影響は充分指摘できると考えられる。

さらに「雲伴居素描」スケッチからは、書齋火床まわりの意匠において、桂離宮だけでなく三溪園臨春閣や曼殊院を参照する様子が読み取れ、白井が他の古典についても自在に自身の意匠に取り込んでいたことが確認できた。

同時代の建築家の事例との比較

同時代の和風を手がけた代表的建築家の作品の中で、桂離宮の影響を本人が認めている例として、堀口捨己の「八勝館八事店」(1950)と村野藤吾の「三養荘」(1989)が挙

げられる。

前者についてはみゆきの間、後者については雄峰を「雲伴居」書齋と比較してみると、付書院の現代における有用性の求め方において、特徴的な差異が見られた。付書院を、堀口は茶を点てる場所として、村野は花等を飾る場所として計画したのに対し、白井は書を書く場所として計画したのである。

この点に前述の数寄屋批判とも重なる、白井の付書院批評が見て取れる。白井は、数寄屋を批判した上で、「書院の前身」なるものを、目差すべきものとして挙げたが、これは一部の人間だけが享受する、官能に媚びた装飾化した形式を否定し、民衆の生活の実用に即した空間をよしとするものであった。この構図を、付書院についても考えてみると、「書院の前身」に相当するものとして、出付机というものが指摘できる。付書院は、大成した書院造において装飾的な場所であったものの、その起源は出付机と呼ばれる、書を読み、物を書く、実用に即した場所であったからである。

結 論

白井は、和風建築について一貫して数寄屋を否定する立場をとったが、桂離宮については物的手本として認める姿勢も見せており、白井の桂離宮観は両義的なものであったと言える。

「雲伴居」構想の過程からは、白井が、桂離宮やその他の古典の意匠を自身の設計に取り込む様子が確認できた。さらに書齋上段の計画では、桂離宮を参考としながら、付書院という形式を「書く」という行為の場所として捉え直し、その装飾的要素を批判して、伝統的様式に対する批評的意匠を完成させたものと考えられる。